

ラジオドラマ 脚本

「深夜3時のBAR TIME」

作 唐下浩

【あらすじ】

六本木9丁目の路地裏に、深夜3時に開店するBARがあった。けれどもこのBARには酒も料理も置いていない。なぜなら……。

開店直後にBARを訪れた深海エリ(27)は、お酒も料理もないBARに驚愕した。BARに置いてあったのは、飲食とは関係ない物ばかり。そして、それらを注文することで、持ち主だった人の思い出話を聞けるというのが、このBARのシステムだったのだ。

エリは興味本位でバーテン(年齢不詳)に勧められるままに注文するが、聞かされる思い出は実にくだらない。それでも、エリの顔から笑みがこぼれていた。やがて、20年前に失踪したエリの父が持っていたプラスチック製の笛がBARにあることを知ったエリは戸惑いながらも、父と笛にまつわる思い出話を聞くことに……。

それは20年前、母娘を捨てて失踪したとばかり思っていた父が、川で溺れたエリを命に代えて守った話だった。

【登場人物】

バーテン(年齢不詳) BARのマスター

深海エリ(27) OL

ナレーター

『ピーー!』という笛の音。

ナレーター「港区六本木9丁目の路地裏に、深夜3時から開店するBARがあった。このBARにはお酒も料理も置いていない。売っているのは、ちよつと変わった物だった。それはもしかしたら、アナタの物だったかも。え？ そんなわけないって？ BARではいつでも不思議なドラマが待っているのです……」

ドアが開き、揺れるベルの音。

バーテン「いらっしやいませ」

エリ「(酔っぱらって)ういゝ、まだやってるう？ マスター」

バーテン「さきほど開店したところです」

エリ「え？ 今、3時だよ！？ このBAR深夜3時開店なの！？

そんなんじや、お客さん来ないでしょう」

バーテン「いいえ。ちゃんと(あなたが)来ましたよ」

エリ「(笑って)あはは。来ちゃったー！」

ナレーター「どうやら、本日の物語の主人公は彼女のようです。

それでは……どうか。ごゆっくり……」

エリ「ぐへー」

バーテン「ずいぶんと飲まれたようですね」

エリ「ううん！ 全然たりない！ もっともっと飲みたいのに、

さっきまでいたお店、追い出されちゃった」

バーテン「そうですね……」

エリ「だって、頼んだ赤ワインがなかなか来ないから。カウンターにあった赤ワインのボトル勝手に開けて、ラッパ飲みしたの」

バーテン「よくある話ですね」

エリ「そしたらさ、さすがにキツくて。口に入れたワイン全部だし

ちゃったんだよね。隣に座ってたお客さんの頭の上に……」

バーテン「……よくある話ですね」

エリ「それで、二度と来るなって追い出されちゃったの。お客さんに」

バーテン「お客さんに！？ 店主じゃなくて？ よくある話ですね」

エリ「そう！ よくある話なのに。どうして私がこんな目にあわなきゃいけないわけー？」

バーテン「（小声で）迷惑な客だな」

エリ「そうなの！ 迷惑な客だったの！ だいたい、白いワイシャツが赤に染まったぐらいであんな怒る？ オシヤレじゃん！ むしろ感謝されても良いくらい。そう思わない？」

バーテン「そう……思いません」

エリ「でしょー！ 良かった、話の分かるマスターで」

バーテン「（乾いた笑い）はい」

エリ「今日は……どうしても飲みたいの。嫌なことを思い出しちゃうから……」

バーテン「嫌なことと言うのは……？」

エリ「えーっと……」

バーテン「これは失礼致しました。初対面のお客様に、無神経なことを聞いてしまって」

エリ「ううん。こんな夜は誰かに話したくなるから。それに……」

バーテン「それに……？」

エリ「マスターとは初対面な気がしないの」

バーテン「そうですか？ それでは是非、私に話してみてください」

エリ「え……聞いてくれるの？」

バーテン「喜んで」

BGMが流れる（適当なタイミングでF・O）。

エリ「20年前の今日ね。私は父と山に魚釣りに行ったんだけど、

足を滑らして川に落ちてしまったの。私泳げなくて溺れちゃって。

そしたら父は……」

バーテン「……お父様は？」

エリ「私を見殺しにした」

バーテン「……」

エリ「近所の中学生が助けに来てくれなかったら、私は死んでた」

バーテン「……」

エリ「なーんて、なんてね。もう昔の話さー。よくある話でしょ？」

バーテン「いえ。そんなことは……」

エリ「じゃあ、そういうことで、ワインちょうだい。赤ね」

バーテン「ありません」

エリ「えっ!？」

バーテン「ありません」

エリ「じゃあ、そういうことで、ワインちょうだい。白ね」

バーテン「え? 赤じゃないんですか？」

エリ「そうよー! でもないんでしょ? 早く白いワインを持って

来て、グラスで良いから」

バーテン「ありません」

エリ「は? ワイン無いの? もうビールで良いわ」

バーテン「ありません」

エリ「ええ? 何だったらあるの? ウイスキー? 焼酎? カク

テル? モッコリ?」

バーテン「モッコリ!？」

エリ「……マッコリよ」

バーテン「マッコリをモッコリと呼んだのは、あなたで三人目です」

エリ「そんないいから! なんでも良いから酒もってこーい!」

バーテン「ありません。ウチはお酒を置いていないので……」

エリ「どういうこと? ここBARよね。お酒を売らないで、一体

何を売っているって言うの?」

バーテン「思い出です」

エリ「……思い出？」

バーテン「以前は美味しいワインやカクテルを、お客様に飲んでいただきました。けれど、店は全く繁盛せず、父でもある先代のマスターは、無理がたたってこの世を去りました。それから私は、酒も料理もやめて、このシステムを始めることにしたのです」

エリ「それが……思い出？」

バーテン「（重々しく）はい。こちらの写真集をご覧ください」

エリ「写真集？ なんじゃこのナイスバディな体は？」

バーテン「いかがですか？」

エリ「あなた、おっぱい星人だったの？」

バーテン「（動揺）わ、私のじゃありません！」

エリ「じゃあ誰の？」

バーテン「それは、こちらの商品を購入した方にしか言えませんね」

エリ「いらぬいわよ、そんなハレンチな写真集」

バーテン「気になりませんか？」

エリ「は？」

バーテン「こちらの商品にどんな思い出がつまっているのか……」

エリ「この写真集を買ったら、その思い出とやらが聞けるって言うの？」

バーテン「はい。それがうちのBARのシステムです」

エリ「んー……いくら？」

バーテン「二千円です」

エリ「原価？ まあ良いわ。ちよつと面白そうだし。ちようだい」

バーテン「かしこまりました」

指を『パチンツ！』と鳴らすバーテン。

BGMが流れる（適当なタイミングでF・O）。

バーテン「こちらの写真集の持ち主、名前は橘雅人。彼が、生涯で買った写真集はこの一冊のみ。中学を卒業する頃、彼はだんだん

女性の体が気になってきた。胸のふくらみやスカートの中。日々もんもんとする毎日。そしてついに彼は、ある行動をとった！」

エリ「まさか……性犯罪!？」

バーテン「彼は本屋に駆け込んだ!　そして棚に並んであったこの写真集とカウンターにいる店員を交互に見た。だめだ、今はダメだ。店員が女だ。もうちょっと待て。それから待つこと3時間」

エリ「3時間!？」

バーテン「店員が男に変わりました。今だ!　彼は写真集をもってカウンターに向かって走った!　全力で!　だがしかーし!」

エリ「……」

バーテン「彼の前にバスの運転手らしき人が絆創膏を持ってカウンターに並びました。彼は焦った!　なぜだ!　なぜ本屋に絆創膏が売っているのだ!？」

エリ「……」

バーテン「彼はヒヤヒヤした。こんな大きな写真集を持っている所を誰かに見られでもしたら。だが更なる悲劇が彼を襲った」

エリ「……」

バーテン「『こちらにどうぞ!』ってさっきまでカウンターにいた女性店員が彼を呼んだのだ。そして結局彼は、女性店員から写真集を買うはめになりました。そう、こちらの写真集を!」

エリ「(ドン引き)」

バーテン「(息切れ)　いかがでしたか?」

エリ「酔いが醒める瞬間って、こんな感じなのね」

バーテン「ボン、キュツ、ボーン!」

写真集をゴミ箱に投げるバーテン。

エリ「えー!?　捨てた!?　それゴミ箱よね!?　良いの!？」

橘雅人「って人の大事な思い出なんじゃ」

バーテン「良いんです。人の思い出なんて、ゴミばかり!」

エリ「それを言っちゃ、元も子もないような。もう普通にお酒売れ」
バーテン「(遮って) それではこちらの商品はいかがでしょうか？」

エリ「それ、注射器？ 今度はちゃんとした思い出でしょうね」

バーテン「当店自慢の、おすすめ商品ですよ。この注射器は」

エリ「いくら？」

バーテン「一万円です」

エリ「一万円？ まあ良いわ」

バーテン「(驚いて) 良いの？」

エリ「私これでも広告会社で働いてるの。もうバリバリのキャリア
ウーマン！ 絵に描いたようなブラック会社だけど、給料だけは

良いのよね」

バーテン「ありがとうございます。では……」

指を『パチンツ！』と鳴らすバーテン。

BGMが流れる(適当なタイミングでF・O)。

バーテン「こちらの注射器の持ち主。名前は橘雅人」

エリ「また橘！？」

バーテン「はい。彼は大学を卒業後、社会人になり、会社の意向で
インフルエンザの予防接種を病院で受けることになりました。そ
して診察室で看護師に『服を脱いで下さい』と言われた彼は上着
を脱ぎ始めました。それから下着も全て脱いで、スッポンポン」

エリ「なんでー？」

バーテン「さあ……。きっと注射が久しぶりだったから、予防接種
がどういものか分かっていなかったのでしょう。何と勘違いし
たのか……スッポンポンになった彼を見た看護師も医者も全員、
診察室から逃げ出した。だから彼は、自分で注射をうった」

エリ「それ……絶対うそでしょ。だいたい何で彼が注射器を」

バーテン「それはですね……(笑いだす)」

エリ「なに？」

バーテン 「(笑って) モッコリ」

エリ 「はあー！ 誰がモッコリよ」

バーテン 「これは失礼いたしました。レディに向かつて……むふっ」
エリ 「ったく……ふふっ。でも、なんか楽しいかも。くっだらな
思い出しかないのに。お酒以外で、こんな楽しい気分になったの
は久しぶり」

バーテン 「ありがとうございます。『BARの一番の魅力はお酒や
料理じゃない』っていうのが、父の口癖でしたから」

エリ 「素敵なお父さんね」

バーテン 「はい」

エリ 「良いなあー。私の父なんて……」

バーテン 「大丈夫ですか？ 顔色が悪いようですが」

エリ 「だめだな。早く忘れたいのに、あの日のこと……」

バーテン 「あの日、ですか……」

エリ 「ねえ、他にはないの？ 思い出！ タチバナ マサト以外の
思い出」

バーテン 「ありますよ、こちらに……」

エリ 「(驚愕)！？ それは……」

バーテン 「いかなされましたか？」

エリ 「どうして……どうしてそれを、あなたが持っているのよ！？」

バーテン 「それは企業秘密です」

エリ 「だって、その笛は……」

バーテン 「こちらの笛が？ 何か？」

エリ 「……さようなら」

店から出て行こうとするエリの足音。

マスターが、『ピーー！』と笛をふく。

立ち止まるエリ、足音が止まる。

バーテン 「あなた、この笛の音を聞いて、このBARに来たのでは

ありませんか？」

エリ「違う……」

バーテン「本当は、この笛にまつわる思い出話が聞きたくて、ウズしているのではありませんか？」

エリ「違う！」

バーテン「……」

エリ「その人の思い出は、いらない」

バーテン「そうですか……」

エリ「あなたは知ってるんだよね？ その人が誰か？ どんなことをしたのか……」

バーテン「はい。よく知っております」

エリ「じゃあなんで？ その笛の思い出を聞いて私が喜ぶことがあるって言うの！？」

バーテン「それは分かりません。ただ、よくも悪くもあなたよりは、真実を知っているかと……」

エリ「はー？ その笛の持ち主は私の父。私を見殺しにした人！
それが真実なの！」

バーテン「……（ふーん）」

エリ「しかも、見殺しにした挙げ句、私と母を見捨てて失踪した。
お母さんは、女手一つで私を育てるため、働いて働いて。

アイツが失踪した翌年、疲れ果てたお母さんは、横断歩道を赤信号で渡って、トラックに跳ねられた……」

バーテン「……」

エリ「それから私は、誰も自分を知らない場所で、ひとりぼっちで生きて来たの……」

バーテン「……」

エリ「そんな最低な思い出しかないその笛に、一体何があるっていうの！？」

バーテン「130円」

エリ「はあ！？」

バーテン「あの日何が起こったのか。知りたいのなら、こちらの笛を買って下さい。お値段は130円と、お手ごろ価格です」

エリ「そんなやつすい思い出なんだ……バカにしてるの？」

バーテン「持ち主の方による希望価格です。それに、値段が高い物だからといって、必ずしもお金に見合った価値があるとは限りません。逆もしかりです」

エリ「130……」

バーテン「はい。130円です」

エリ「払うわ」

コイン（小銭）がカウンターの上で跳ねる音。

バーテン「ありがとうございます」

指を『パチンッ！』と鳴らすバーテン。

BGMが流れる（適当なタイミングでF・O）。

エリ「なんで……（啞然）」

バーテン「こちらの笛の持ち主。名前は深海透。深海エリ、あなたのお父様です。深海透さんは、小学生の娘からもらったこの笛を、いつもお守り代わりに持ち歩いていました」

エリ「……」

バーテン「よっぽど、あなたからもらえたのが嬉しかったのでしよう。彼は、娘も奥様も心の底から愛していた」

エリ「嘘よ！ どうしてそんなドラマな話をするの？ アイツは私もお母さんも見捨ててどっか行っちゃったのよ！ 愛してるわけじゃない！」

バーテン「（語気を強めて）あなたのお父様は失踪したんじゃないじゃない！」

エリ「……どういうこと？」

バーテン「お父様は、川で溺れて、この世を去ったのです」

エリ「っ！？（絶句）」

バーテン「あなたとお父様が山に魚釣りに行った日、あなたは川に落ちて流されてしまった。その時、慌てたお父様は川に飛び込んであなただけを助けようとした。だけど、あなたのお父様はカナヅチでした。あなたが泳げないのは、お父様ゆずり。そうですね？」

エリ「はい……」

バーテン「それでも、あなたを助けたい一心で、あなたを追って川に飛び込んだ」

川に飛び込む音。

バーテン「お父様は、溺れながらもポケットから笛を取り出した。

そして助けを呼ぶために、手足をバタバタさせながら必死に笛を吹き続けた。その笛の音に気付いた近所の中学生が、あなたが溺れているのを見つけて助けに来た。しかし、中学生が見たのはあなただけだった。きっと、あなたのお父様は中学生が来るのが見えて、安心して力尽きたのでしょう」

エリ「何それ……そんなの絶対嘘よ！ お母さんは、あの人はどっか遠くに行ったって」

バーテン「（遮って）そういうことにしたのでしょう。あなただけには！」

エリ「……」

バーテン「あなたの命を助けようとしてお父様が命を落としたなんて、まだ幼いあなたには言えなかった。いずれあなたにも本当のことを話すつもりだったと思います。けれど、お母様は……」

エリ「そんな……」

バーテン「この笛は、あなたの命を救った笛です。まさにお守りです。たとえ値段が安くても、お金では絶対に買えない想いが詰まっているのです！」

エリ「この笛を、お父さんが……」

バーテン「はい。だから、決してやっすい思い出だなんてことは」

エリ「……あの」

バーテン「はい？」

エリ「笛……吹いてみても良いですか？」

バーテン「どうぞ。その笛はもう、購入したあなたの物です」

エリ「思いつきり。吹いてみても、良いですか？」

バーテン「ええ。あなただけのBAR TIMEですから」

店内に「ピーー！」「ピーー！」と、笛の音が鳴り響く。

エリ「お父さん……（涙）」

バーテン「あっ。ハンカチ、ハンカチ。（匂いをかいで）ちょっとくさいけど、まっ、いっか。（イケメン風に）これ、使えよ」

エリ「誕生日……」

バーテン「はい？」

エリ「私の誕生日なの……1月30日は……」

バーテン「あ……1月30日で130円。あなたの誕生日は、今日でしたか。それはそれは、お誕生日おめでとうございます」

エリ「良かった……私は、ひとりぼっちじゃなかった」

バーテン「喜んでいただき、なによりです」

エリ「マスター、ありがとうございます」

バーテン「いえいえ、まあ店としてはたいした売り上げにはなりません」

エリ「あの時は命を救ってくれて、本当にありがとうございます」

バーテン「いえいえ、あなたの命を救ったのはそちらの笛であって、

あなたのお父様です」

エリ「はい。そして、あなた……」

バーテン「へ？」

エリ「どっかで見た顔だと思ってたんだよな。川で溺れた私を助け

てくれた中学生って、あなたよね？」

バーテン「違います」

エリ「ええ？」

バーテン「他人の空似です」

エリ「そんなことない。あなたの名前だって覚えてる。ていうか、思い出した」

バーテン「やめて下さい」

エリ「あなたの……」

バーテン「（焦って）やめて、本当にやめて」

エリ「名前は……」

バーテン「まじで？　お願い！　あつ、ワイン買って来るから！」

エリ「タチバナ　マサトー！」

バーテン「ああ……（くずれ落ちる）」

エリ「まさか命の恩人が、変態だったなんて……」

バーテン「変態って言わないで。これでも紳士を目指しているので」

エリ「でも、どうして私がお父さんにあげた笛をあなたが持っているたの？　しかも希望価格って、どういうこと？」

バーテン「当店で扱っている商品は、全て亡くなった方々から、

買い取った物なのです。本当は企業秘密ですけど」

エリ「は？　それって死んだ人から物を買ってるってこと？」

バーテン「（重々しく）はい」

沈黙。

エリ「まっ、またまた……。そんな訳ないじゃん！　だったらさ、

あなたも死んでるってことになるのよ！」

バーテン「1千万です！」

エリ「1千万!？」

バーテン「それが知りたいのなら、このBARを買って下さい。

私とこの店の思い出を」

エリ「良いわ！」

バーテン「うそー？」

エリ「カードで良い？」

バーテン「いやいやー。ここを売ってしまったら、私には行く所がありません。それに、このBARにはとてつもなく大きな秘密が」

エリ「大丈夫よ」

バーテン「な、何が？」

エリ「私がこのBARを守るから」

バーテン「はい……？」

エリ「この店も、あなたとあなたのお父さんとの思い出も、私が守ってみせる。あなたが私とお父さんとの思い出を大切に守ってくれたみたいに、私も絶対にあなたのことを忘れない。だから話して。あなたと、このBARの思い出」

バーテン「……本気ですか？」

エリ「明日からこのBARのマスターは、わ・た・し」

バーテン「（ため息）かしこまりました」

指を『パチンツ！』と鳴らすバーテン。

BGMが流れる（適当なタイミングでF・O）。

ナレーター「こうして、ひとつの物語がおわり、また新たな物語が始まりました。そんな風に、誰かの思い出は、受け継がれていくのかもしれないね。そして、次の物語の主人公はあなたかも」

ドアが開き、揺れるベルの音。

エリ「いらっしやいませ」

f i n